

唯願わくは慮いたしもう為からず 仏の滅度の後の 恐怖悪世の中に於いて 我等当に広く説くべし

及び刀杖を加うる者有らん 我等皆当に忍ぶべし

悪世の中の比丘は 邪智にして心諂曲に

未だ得ざるを為れ得たりと謂い 我慢の心充滿せん

或は阿練若に 納衣にして空閑に在って

自ら眞の道を行すと謂いて 人間を輕賤する者有らん

利養に貪著するが故に 白衣の身に法を説いて

世に恭敬せらるることを為ること 六通の羅漢の如くならん

是人悪心を懷き 常に世俗の事を念ふ

名を阿練若に仮つて 好んで我等が過を出さん

而も是の如き言を作さん 此の諸の比丘等は

利養を貪るを為つての故に 外道の論議を説く

自ら此の經典を作つて 世間の人を誑惑す

名聞を求むるを為つての故に 分別して是の経を説くと

常に大衆の中に在って 我等を毀らんと欲するが故に

國王大臣 婆羅門居士

及び余の比丘衆に向つて 誹謗して我が悪を説いて

是れ邪見の人 外道の論議を説くと謂わん

我等仏を敬うが故に 悉く是の諸悪を忍ばん

斯れに輕しめて 汝等は皆是れ仏なりと言われん

此の如き輕慢の言を 皆當に忍んで之を受くべし

濁劫悪世の中には 多く諸の恐怖有らん

悪鬼其の身に入りて 我を罵毀辱せん

我等仏を敬信して 當に忍辱の鎧を著るべし

是の経を説かんが為の故に 此の諸の難事を忍ばん

我身命を愛せず 但無上道を惜しむ

我等來世に於いて 仏の所囑を護持せん

世尊自ら當に知しめすべし 濁世の惡比丘は

仏の方便 隨宜所説の法を知らずして

惡口して響聲し 数数擯出せられ

塔寺を遠離せん 是の如き等の衆惡をも

仏の告教を念うが故に 皆當に是の事を忍ぶべし

諸の聚落城邑に 其れ法を求むる者有らば

我皆其の所に到つて 仏の所囑の法を説かん

我は是れ世尊の使なり 衆に処するに畏るる所無し

我當に善く法を説くべし 願わくは仏安穩に住したまえ

我世尊の前 諸の來りたまえる十方の仏に於いて

是の如き誓言を發す 仏自ら我が心を知しめせ

勸持品に云く「唯願わくは慮いたしもうべからず仏滅度の後恐怖悪世の中に於て我等當に広く説くべし、諸の無

智の人の惡口罵毀辱し及び刀杖を加うる者有らん我等皆當に忍ぶべし、惡世の中の比丘は邪智にして心諂曲に未

だ得ざるを為れ得たりと謂い我慢の心充滿せん、或は阿練若に納衣にして空閑に在つて自ら眞の道を行すと謂つ

て人間を輕賤する者有らん利養に貪著するが故に白衣の身に法を説いて世に恭敬せらるることを為ること六通の

羅漢の如くならん、是人悪心を懷き常に世俗の事を念ふ阿練若に仮つて好んで我等が過を出さん、常に大衆

の中に在つて我等を毀らんと欲するが故に國王大臣、婆羅門、居士及び余の比丘衆に向つて誹謗して我が悪を説

いて是れ邪見の人、外道の論議を説くと謂わん、濁劫悪世の中には多く諸の恐怖有らん惡鬼其身に入つて我を罵

毀辱せん、濁世の惡比丘は仏の方便隨宜の所説の法を知らず惡口し響聲し數数擯出せられん、記の八

に云く「文に三初に一行は通じて邪人を明す即ち俗衆なり、次に一行は道門増上慢者を明す、三に七行は僧聖

増上慢の者を明す、此の三の中に初は忍ぶ可し次の者は前に過ぎたり第三も甚だし後後の者は輕微り難きを以

ての故に」等云云、東春に智度法師云く「初に有諸より下の五行は第一に一個は三業の惡を忍ぶ是れ外惡の人の

次に惡世の下の一個は是れ上慢出家の人の第三に或有阿練若より下の三偈は即是れ出家の處に一切の惡人を擯

す」等云云、又云く「常在大衆より下の兩行は公處に向つて法を毀り人を誹す」等云云、涅槃經の九に云く「善

男子一闍提有り羅漢の像を作して空處に住し方等大乘經典を誹謗せん諸の凡夫人見已つて皆眞の阿羅漢は大菩薩

なりと謂わん」等云云、又云く「爾の時に是の經闍提に於て當に広く流布すべし、是の時に當に諸の惡比丘有

文証理証 四 主の安國論

客則ち和きて曰く「経を下し僧を誹すること一人には論じ難し、然れども大乘經六百三十七部二千八百八十

三卷並びに一切の諸佛菩薩及び諸の世天等を以て捨閉闍提の四字に載す其の詞勿論なり、其の文顯然なり、此

の現證を守つて其の誹謗を成せども迷うて言うか覺りて語るか、賢愚非せず是非定難し、但し災難の起りは

遷転に因るの由、其の詞を盛に亦よ其の旨を談ず、所詮天下泰平國土安穩は君臣の樂う所土民の思ふ所なり、

夫れ國は法に依つて昌え法は人に因つて興し國亡び人滅せば仏を誰か崇む可き法を誰か信ず可きや、先ず國家

を折りて須く仏法を立つべし若し災を消し難を止むるの術有らば闍提と欲す。

主人の曰く「余は是れ願恩にして敢て賢を存せず唯經文に就いて聊か所存を述べん、抑も治術の旨内外の間其

の文幾多そや具に舉ぐ可きこと難し、但し仏道に入つて數ば愚案を廻すに謗法の人を禁めて正道の侶を重ん

ぜば國中安穩にして天下泰平ならん。

又云く「我れ往昔を念うに闍提に於て大國の王と作れり名を仙と曰いき、大乘經典を愛念し敬重し其の心

純善に惡嫉嫉極有ること無し、善男子我爾の時に於て心に大乘を重んず婆羅門の方等を誹謗するを聞き聞き巴つ

て即時に其の命根を斷す、善男子是の因縁を以て是より已來地獄に墮せし」と、又云く「如來昔國王と為りて善